

オンデマンド型授業コンテンツ公開とそのあり方について

The result of the Lecture-contents distribution on demand

山下 泰生*
Yasuo YAMASHITA

抄録

講義授業の状況をそのままストーリーミング形式のコンテンツとして収録し、毎回の授業後オンライン上に公開をする取り組みを実践してきた。

同時に、授業期間の終了時期に受講生に対してオンデマンド型授業コンテンツの公開に関するアンケート調査を何度か実施してきた。そのアンケートには、当該授業の公開コンテンツに関する設問以外に、一般的な授業コンテンツの公開に関する設問も設定している。

本稿では、授業の状況を収録し公開する方法と、一般的な授業コンテンツ配信に対するアンケート回答結果からオンデマンド型コンテンツの公開に対する受講生の捉え方について検証した結果を報告し、学生のニーズに応えるためのコンテンツ作成・公開のあり方について考察する。

Abstract

The situation of the lecture was recorded and it has been distributed as contents of a type lesson on demand (on-demand type lecture-contents). The questionnaire about public on-demand type lecture-contents has been carried out several times. In a questionnaire result, distribution of the contents is desired. However, the actual capacity factor was not high. The student desires to be able to use, when he is required.

In this paper, considers the state of the on-demand type contents for the student's needs.

1. はじめに

ICT 環境の技術の進展に伴って、その利活用の状況も大きく変化してきている。教育の分野でもネットワークを利用した教育環境の展開が進んできている。

その展開パターンは大きく2つのパターンに分類される。一つは“遠隔授業”であり、遠隔の

* 関西国際大学教育学部

複数地点でネットワークを介して同時にリアルタイムで授業が進められるパターンである。この方式は、教員が存在する地点の以外の受講生は、画面に映る教員や教室風景と教員の音声を視聴することで、授業を受講することになる。リアルタイムであるため双方向性機能により、遠隔地点の受講生からの質問などを受けることも可能である。

もう一つのパターンは、ネットワーク上にある学習する教材（コンテンツ）に受講生がアクセスをして学習を進める方式であり、受講生自身の操作により進められるため、その方式のコンテンツを“オンデマンド型コンテンツ”と呼んでいる。オンデマンド型コンテンツでの学習の場合、受講生の都合のよい時間帯で学習を進めることができるメリットがある反面、学習時の教員とのリアルタイムの双方向性は望めない。

筆者が担当している講義科目の授業状況を記録し、毎回の授業後にネットワーク上にストリーミング形式のオンデマンド型コンテンツとして公開をする取り組みを実践してきた。

その授業は、授業毎にワークシートを配布し、そこに記載する内容をスライドで表示をしながら解説や補足をする方式で進められる。ワークシートは毎授業ごとに回収をし、チェックをして次の授業時に返却している。そのために、授業を欠席した場合の補完への対応を大きな目的として、授業状況を公開することにした。

また、当該授業の授業期間の終了時期に受講生に対して、オンデマンド型授業コンテンツの公開に関するアンケート調査をこれまでに数回実施してきた。そのアンケートは、当該授業の公開コンテンツに対する設問だけではなく、一般的な授業コンテンツの公開に対して、コンテンツ公開の是非や公開する場合の希望する媒体や公開内容についても設問項目としている。さらに、本年（2011年）の調査票では、従来までの公開の希望時期（タイミング）に対する設問を、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの操作に対する習熟度に関する設問項目に変更をした。

本稿では、オンデマンド型の授業コンテンツ作成から公開までの方法について説明し、受講生のアンケート調査の中で、特に一般的な授業コンテンツの公開を中心とした集計結果よりオンデマンド型コンテンツの公開に対する学生の捉え方について検証した結果を報告し、学生のニーズに応えるためのコンテンツ作成・公開に関して考察する。

2. 授業コンテンツの作成と公開

2.1 授業コンテンツの作成と公開方法の概略

授業コンテンツの公開を始めた当初は、MS-Producer と呼ばれるツール（パソコンソフト）を利用して、授業で使用するパワーポイントのスライドデータを直接ホームページ形式（HTML）にコンテンツ化し、WWW サーバを利用して（ホームページ形式で）公開していた。

この方法は、スライドのデータが作成されていれば、実際の授業とは独立して任意の時間にコンテンツ化が可能である利点はあったが、授業中での追加の解説や補足説明事項に関しては、視聴することができない欠点もあった。また、ストリーミング化されたコンテンツであるもの一般的なホームページ形式での公開であるため、不特定多数向けのコンテンツの位置づけとなる。そのため著作権に関わるセキュリティ面の問題も一部あったため、パスワード保護の追加の仕組

みを付加することで対応していた。

2006年度に、プレゼンテーションの内容をリアルタイムでデータとして収録するEZプレゼンターと呼ばれるPCシステムと、Web-Classと呼ばれるWebベースのE-Learning（WBT：web-based training）システムがそれぞれ導入された。この2つのシステムは、各々独立したシステムであるが、その2システムの機能を連携させることで効率的なコンテンツの作成から公開までを実現することを考案した。

EZプレゼンターは、主に研修会等の記録用として利用されていたが、そのシステムを実際の授業の収録に利用することで、授業時に補助者を必要とせず、授業担当者だけで授業内容のリアルタイムでの収録が可能となった。また、Web-Classにより、作成されたコンテンツを公開する作業も大幅に簡素化された。最も大きなメリットは、Web-Classのユーザ管理機能を利用することで、コンテンツの視聴に関する利用者や利用時間などの制御が可能となった点である。

EZプレゼンターを利用した教材コンテンツの作成とWeb-Classによるコンテンツの公開の概要を図2.1-1に示す

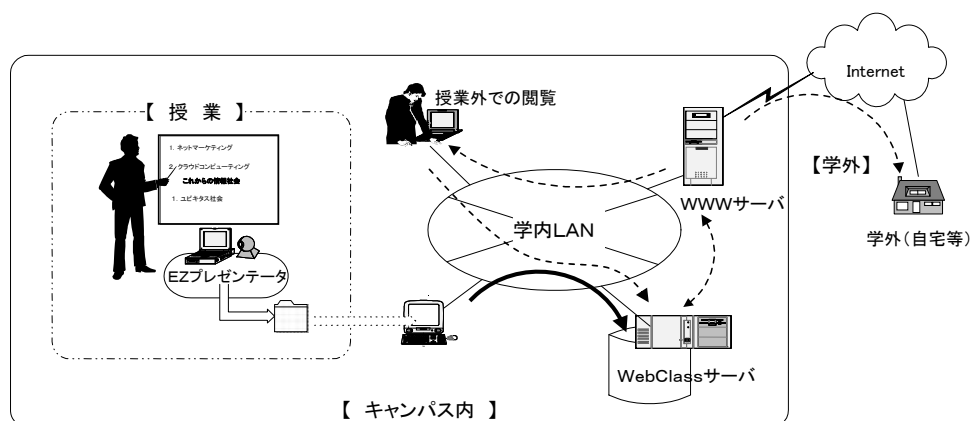


図2.1-1 EZプレゼンターとWeb-Classを利用した教材コンテンツの配信

上述の通り、コンテンツの作成や公開方法は、公開当初の方法から変更されたが、ストリーミング形式のコンテンツデータでオンデマンド型の公開である点は同じである。

一般的に、オンデマンド型で配信されるコンテンツは、閲覧者側の都合に合わせて視聴することを基本としたuser-orientedなコンテンツであるといえる。

2.2 EZプレゼンターを利用した教材コンテンツ作成と公開

(1) EZプレゼンターの特徴とコンテンツの作成

EZプレゼンターとは、PowerPointを利用したスライドショーの内容を、プレゼンテーションと同時に撮影するビデオデータや音声とも併せてリアルタイムでWebコンテンツ化するパソコンシステムである。

EZプレゼンターを利用したコンテンツ作成の特徴は、授業を進行しながらリアルタイムで記録されていく点である。授業自身は、PowerPointのスライドショーを見せながら進めていくが、マイクとカメラを接続して、授業の状況を撮影すると、スライドデータ、音声、映像すべて

の同期がとれた教材コンテンツを作ることが可能である。

EZ プレゼンターが作成するコンテンツは、HTML 形式のデータとなっているため、そのまま Web サーバにアップロードすることが可能である。しかし、作成した教材コンテンツの配信を Web-Class を利用して行った。その理由としては、WBT システムの Web-Class を利用することで、単なる教材コンテンツの配信だけではなく、コンテンツの視聴に関する利用者や利用時間などの制御が可能となった点があげられる。さらに、学習者の操作履歴の確認できる機能により、学習者の動向などを把握することも可能となる。

EZ プレゼンターを利用して授業コンテンツを作成するためには、あらかじめ当該授業で使用する PowerPoint のスライドデータを準備しておき、実際の授業時に EZ プレゼンターが導入されているパソコンを教室に持ち込む必要がある。授業開始までにカメラやマイクを接続して、授業開始と同時に EZ プレゼンターを起動し、使用するスライドデータを選択して記録を開始すると、通常の PowerPoint のスライドショーの実行と全く同じ状態となる。コンテンツデータは、授業を進行しながら自動的に蓄積されるため、授業が終了した時点でコンテンツデータの作成も終了している。その後、作成されたコンテンツデータ全てを取り出し、圧縮処理をして Web-Class に登録することで公開準備が完了する。

EZ プレゼンターは、作成後のコンテンツデータの編集機能を有するため、コンテンツデータを取り出す前に編集をすることも可能である。その際、ビデオで撮影した映像や音声も同期を取りながら編集することが可能である。

例えば、授業中にスライド表示操作を誤った場合（誤って先のスライドに進めてしまったため元に戻す、等）など、そのままの流れがデータとして蓄積されるため、そのような場合、授業終了後に作成後のコンテンツデータに対して不要なスライド部分（誤って先に進めてしまった部分）を削除する、というような編集機能である。

しかし、筆者は、コンテンツ作成の省力化を目的としていることと、可能な限り授業の臨場感を伝えるため、あえて、Web-Class へ登録前のコンテンツデータに対する編集は行っていない。したがって、授業終了後に作成されたコンテンツ全体に対して圧縮処理だけを行い、そのままコンテンツ登録をするのみであったため、授業 1 回分の授業コンテンツ登録に要する時間は 5 分程度であった。

(2) Web-Class を利用したコンテンツの配信

Web-Class がサポートをしているコンテンツデータは、PowerPoint のスライドデータに限らず、ワープロソフトの文書ファイルや表計算ソフトのファイルなどさまざまである。筆者が実践している方法は、EZ プレゼンターで作成されたコンテンツデータを Web-Class を利用して公開する方法である。しかし、EZ プレゼンターと Web-Class は独立したシステムであるため、直接的にデータレベルで連携をしているわけではない。EZ プレゼンターは、プレゼンテーションの状況をホームページのサイトデータ群として記録していく。そのため、Web-Class への登録に先立ち、EZ プレゼンターが記録したサイトデータ群を一つにまとめる圧縮処理を必要とする。圧縮処理自身は OS の基本機能で簡単に実行可能である。Web-Class に登録された圧縮処理後の教材コンテンツは、登録時点で Web サーバを介して公開される状態となる。(図 2. 2-1)

登録された教材コンテンツをWeb-Classで視聴するためには、まず、Web上でWeb-Classのサーバにアクセスをする必要がある。その後、Web-ClassのIDでログインをし、該当する授業（Web-Classでは「コース」と呼ぶ）を選択し、登録されている教材コンテンツを選択すると教材コンテンツの再生が始まる。

Web-Class自身が、利用者のID管理を行っているため、セキュリティ面においても、外部公開用のWWWサーバを経由して学外からの閲覧が可能である。WBTシステムとしてのWeb-Classのユーザ管理機能により、教材コンテンツ単位で公開期間や視聴対象者（学習者）を限定することも可能である。

ただし、Web-Classを利用するためには、あらかじめ授業として利用するためのコース登録が必要であり、コースの登録操作は、Web-Classのシステム管理者によって行われる。特定のコースに対して受講者の登録も行うことができるが、機能的に必須とはなっていない。受講者の登録作業は教員権限のIDで行うことが可能であり、受講者登録がされていない場合は、Web-ClassのID所有者全員の閲覧が可能である。

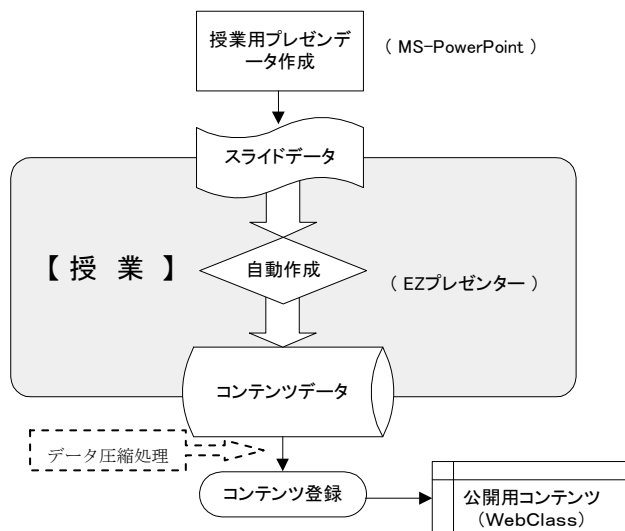


図2.2-1 EZプレゼンターを利用したコンテンツ作成の流れ

3. コンテンツの利用とその評価について

3.1 授業コンテンツの利用

筆者が実践している授業コンテンツの公開に関しては、当該授業の第1回目で、受講者に対し公開されているコンテンツの閲覧方法を説明し、以降、授業外での随時利用とした。前述の通り、内容的には毎回の授業自身を収録した授業コンテンツであり、終了した授業ごとに公開処理を行った。そのため、同一の授業であっても、開講年度が異なれば異なるコンテンツとして毎年1回目の授業から収録をして公開している。また、2回目以降の授業では特に公開コンテンツについての説明などしておらず、そのため、コンテンツの閲覧は受講者の自由意志となっている。

3.2 コンテンツ利用に関するアンケート調査とその調査結果

(1) アンケート調査概要

授業コンテンツを公開した科目は、「情報と社会（2005年度以前は、情報社会論）」であり、アンケート調査対象者は、当該科目の受講生である。

アンケート調査を実施した年度は、2004年、2005年、2007年、2011年の4回であり、毎回、最

終授業時に実施してきた。アンケートの実施方法は、調査票へ回答を記入する方式であり、各回（調査年ごと）の回答者数は表3-1の通りである。

表3.2-1 アンケート対象者

年度	回答者数	性別		学年			
		男性	女性	1年	2年	3年	4年
2004	56	45	11	1	44	7	4
2005	33	25	8	0	22	9	2
2007	37	35	2	1	24	5	7
2011	93	71	22	28	36	17	12
計	219	176	43	30	126	38	25

(2) 調査項目

アンケート調査で使用した設問項目は、以下にあげる通りであり、大きく (A) 回答者属性、(B) 当該授業のコンテンツ公開について、(C) 一般的な授業公開について、(D) その他と4つに分類した設問構成とした。

表3.2-2 アンケート調査設問項目

- (A) 学部, 学年, 性別, PC使用歴(年数), 自宅インターネット環境の有無
- (B) 当該科目(情報と社会)の公開コンテンツに限定した設問
 - 1) 認知度(授業期間中, 授業内容の公開をどの程度認知していたか?) SA
 - 2) 利用度(どの程度利用したか?) SA
 - 3) 有効性(どの程度有効であったと思うか?) SA
 - 4) 操作の簡便性(閲覧するための操作は簡便であったか?) SA
 - 5) 公開データ形式(HP形式のデータでの公開は良いと思うか?) SA
 - 6) コンテンツのわかりやすさ SA
- (C) 一般的に(当該科目以外の)科目での授業内容公開について
 - 1) 公開の是非(公開すべきかどうか?) SA, その理由 FA
 - 2) 公開する媒体(公開する場合の希望する媒体) MA
 - 3) 公開コンテンツを見る目的(コンテンツを閲覧する目的) MA
 - 4) 必要と思われる公開内容(公開する場合の希望する内容) MA
- (D) *望まれる公開タイミング(~2007年) SA
- (D) *アプリケーション操作の習熟度(Word, Excel, Power-Point)(2011年) SA

上記調査項目において、(B)の全6項目(「1)認知度」~「6)コンテンツのわかりやすさ」と(C)の「1)公開の是非」, 「(D)望まれる公開タイミング」は4段階で一つを選択する回答方式(SA)で、(C)の「2)公開媒体」~「4)必要内容・機能」は、いくつかの選択肢の中から複数回答の方式(MA)で調査を行った。また、(C)の「1)公開の是非」には、選択した理由を自由記述(FA)の項目を設定した。

ただし、「(D)望まれる公開タイミング」に関しては、2007年の調査までの設問で、2011年には、アプリケーションソフト(Word, Excel, Power-Point)の操作に関する習熟度をアプリケーションソフト別に4段階のレベルで回答を求める設問に変更をした。*

3.3 アンケート調査結果

本章では、調査結果の中で、一般的な授業のコンテンツ公開に関する設問に対する回答結果を中心に報告する。

(1) 授業内容の授業外での公開に対する是非 ((C) 1) 公開の是非 SA)

授業内容の公開に対する是非を4段階で回答してもらった集計結果を表3.3-1(a), (b)に示す。表3.3-1(b)は、各調査年単位での全回答者に対する回答比率であり、それをグラフ化したものが図3.3-1である。

表3.3-1(a) 公開の是非

	公開の是非				計
	大変良い	良いと思う	良いとは思わない	全く良いとは思わない	
2004年	14	39	2	1	56
2005年	11	22	0	0	33
2007年	13	23	1	0	37
2011年	26	59	3	5	93
計	64	143	6	6	219

表3.3-1(b) 公開の是非(回答比率)

	公開の是非				計
	大変良い	良いと思う	良いとは思わない	全く良いとは思わない	
2004年	25.00%	69.64%	3.57%	1.79%	100%
2005年	33.33%	66.67%	0.00%	0.00%	100%
2007年	35.14%	62.16%	2.70%	0.00%	100%
2011年	27.96%	63.44%	3.23%	5.38%	100%

表3.3-2 公開の是非の理由

分類		回答数
肯定的意見	欠席時の対応	83
	復習	34
	利便性	10
	その他の肯定的意見	37
	否定的意見	9
Na		46
合計		219

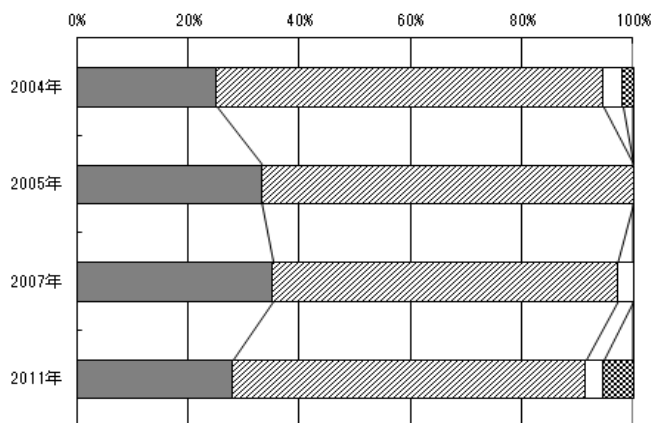


図3.3-1 公開の是非(回答比率)

また、公開の是非の回答に対する理由(FA)の回答に関して、肯定的意見、否定的意見、無回答と大別し、さらに回答数が多い肯定的意見については、「欠席時の対応」、「復習での利用」、「利便性」、「その他」と細分化して集計をした。(表3.3-2)

表3.3-1(a), (b), 図3.3-1より、授業コンテンツの公開に関しては、調査年によらず「大変良い」「良いと思う」の肯定的回答が90%を上回っていることがわかる。

また、表3.3-2より、その理由として「欠席時の対応」や「復習」などの回答数が多くなっていることがわかる。なお、公開の是非の理由の回答において、「予習」と明確に回答していたのは2件のみで、正確には「予習で利用できるから便利」という主旨の回答であったため、「利便性」にカウントをした。

(2) 公開した場合の希望する公開媒体 ((C) 2) 公開する媒体 MA)

授業内容を公開する希望媒体として、ホームページ (HP)、文書ファイル、パワーポイントファイル (PPT)、紙 (掲示による公開を含む)、その他、から希望する媒体を選択 (複数) した集計結果が表 3.3-3 (a), (b) である。表 3.3-3 (b) は、各調査年単位での全回答者数に対する回答比率であり、それをグラフ化したものが図 3.3-2 である。

表 3.3-3 (a) 公開希望媒体

	HP	文書ファイル	PPT	紙(掲示)	その他
2004年	33	17	25	8	1
2005年	30	6	7	1	0
2007年	34	4	12	5	0
2011年	45	24	49	7	3

表 3.3-3 (b) 公開希望媒体 (回答比率)

	HP	文書ファイル	PPT	紙(掲示)	その他
2004年	58.93%	30.36%	44.64%	14.29%	1.79%
2005年	90.91%	18.18%	21.21%	3.03%	0.00%
2007年	91.89%	10.81%	32.43%	13.51%	0.00%
2011年	48.39%	25.81%	52.69%	7.53%	3.23%

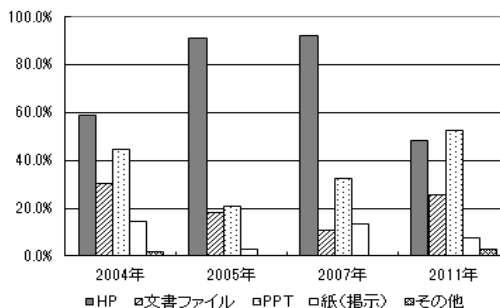


図 3.3-2 公開希望媒体 (回答比率)

表 3.3-3 (a) (b) および図 3.3-2 より、授業のコンテンツを公開する場合に希望される媒体としては、調査年により傾向が異なっているようでもあるが、HP (ホームページ)、PPT (パワーポイントのスライド) が相対的に多く希望されている傾向があることがわかる。

(3) 公開された場合の利用目的 ((C) 3) 公開コンテンツを見る目的 MA)

授業内容が公開された場合にそのコンテンツを見る目的を、予習、復習、自習、試験調べ、その他、の中から選択 (複数) した集計結果が、表 3.3-4 (a), (b) である。表 3.3-4 (b) は、各調査年単位での全回答者数に対する回答比率であり、それをグラフ化したものが図 3.3-3 である。

表 3.3-4 (a) 利用目的

	予習	復習	自習	試験調べ	その他
2004年	7	40	17	31	4
2005年	7	21	6	20	0
2007年	10	24	12	23	1
2011年	13	70	18	40	4

表 3.3-4 (b) 利用目的 (回答比率)

	予習	復習	自習	試験調べ	その他
2004年	12.50%	71.43%	30.36%	55.36%	7.14%
2005年	21.21%	63.64%	18.18%	60.61%	0.00%
2007年	27.03%	64.86%	32.43%	62.16%	2.70%
2011年	13.96%	75.27%	19.35%	43.01%	4.30%

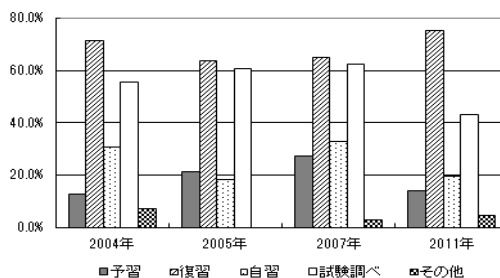


図 3.3-3 利用目的 (回答比率)

表 3.3-4 (a) (b) および図 3.3-3 より、公開された授業コンテンツを利用する目的と

しては、「復習」および「試験調べ」が高くなっていることがわかる。

(4) 公開された場合の必要とする内容 ((C) 4) 必要と思われる公開内容 (MA)

授業内容が公開された場合、どのような内容のコンテンツを必要と思われるかという点について、授業の内容自身、授業の関連情報、試験範囲等の伝達事項、受講者から教員への質問(回答)、受講生同士の連絡、の中から選択(複数)した集計結果が、表3.3-5(a)、(b)である。表3.3-5(b)は、各調査年単位での回答比率であり、それをグラフ化したものが図3.3-4である。

表3.3-5(a) 必要な内容

	授業の内容自身	授業の関連情報	試験範囲等の伝達事項	受講者から教員への質問	受講者同士の連絡
2004年	31	29	33	26	2
2005年	23	14	15	7	1
2007年	15	17	24	10	1
2011年	46	42	37	12	5

表3.3-5(b) 必要な内容(回答比率)

	授業の内容自身	授業の関連情報	試験範囲等の伝達事項	受講者から教員への質問	受講者同士の連絡
2004年	55.36%	51.79%	58.93%	46.43%	3.57%
2005年	69.70%	42.42%	45.45%	21.21%	3.03%
2007年	40.54%	45.95%	64.86%	27.03%	2.70%
2011年	49.46%	45.16%	39.78%	12.90%	5.38%

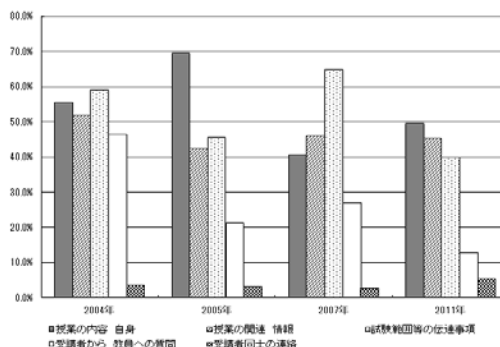


図3.3-4 必要な内容(回答比率)

表3.3-5(a)(b)および図3.3-4より、公開される授業コンテンツとして必要と思われる公開内容については、提示された選択肢の中で特定の項目が際だって高いようには見えない。しかし、「受講生同士の連絡」に関しては、調査年によらず極端に低くなっている。

(5) アプリケーションソフト操作の習熟度に公開希望媒体のちがい(2011年)

今年度(2011年度)より、アンケート調査項目の最後の設問を、アプリケーションソフト操作の習熟度についての設問に変更した。これは、ソフトの操作習熟度によって公開を希望する媒体に違いがあるかどうかを検証するためである。

対象となるアプリケーションソフトは、MS-Word(日本語ワープロ)、MS-Excel(表計算ソフト)、MS-PowerPoint(プレゼンテーションソフト)の3種類で、各々の習熟度に対する4段階(1~4)での回答である。数値が高い方が習熟度も高く、各段階をポイントとすると、アプリケーションソフト単位では最高は4ポイントで、3種類のソフトの習熟度ポイント計は3~12ポイントとなる。

習熟度ポイント計を3ランク(1~6, 7~9, 10~12)に分けて、公開を希望する媒体(C)2)公開する媒体)の回答とのクロス集計結果が、表3.3-6(a)(b)であり、習熟度ポイント計のランク別希望媒体回答比率の分布を図3.3-5に示す。

表3.3-6(a)より、アプリケーションソフト操作の習熟度に対する回答では、3ランクの中で中位ランクが他のランク(上位ランク, 下位ランク)と比較すると多くなっている。そして、

全体的に HP と PPT の媒体希望が多いことは、「(2) 希望する公開媒体」で示したが、アプリケーションソフトの操作習熟度との関連を見てみると、習熟度が上位ランクの場合は公開媒体として HP を希望している率が高く、習熟度ランクが中・低位の場合は、PPT を希望する率が高い傾向にあることがわかる。いずれにしても、デジタル化されている媒体を希望している点には変わりはない。

表 3.3-6 (a) AP 習熟度と希望媒体

	1~6	7~9	10~12	計
HP	5	29	11	45
文書ファイル	3	16	5	24
PPT	6	35	8	49
紙(掲示)	1	3	3	7
計	15	83	27	

表 3.3-6 (b) AP 習熟度と希望媒体 (比率)

	1~6	7~9	10~12
HP	33.3%	34.9%	40.7%
文書ファイル	20.0%	19.3%	18.5%
PPT	40.0%	42.2%	29.6%
紙(掲示)	6.7%	3.6%	11.1%
計	100.0%	100.0%	100.0%

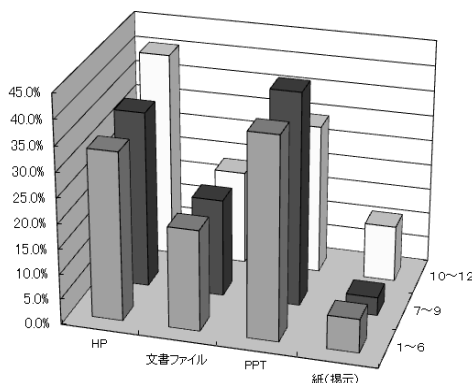


図 3.3-5 AP 習熟度と希望媒体

4. 考察 (アンケート結果による授業コンテンツ公開のあり方について)

授業に関する内容をコンテンツ化しネットワークを利用して公開することに関しては、複数年にわたるアンケート調査の結果、9割以上の回答者が望んでいることが確認できた。

また、公開する場合の希望する媒体は、ホームページやパワーポイントのスライドデータが多く、公開する内容としては、授業に直接関係する内容(授業内容自身、試験範囲、等)を希望する傾向が高い状況であった。また、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの習熟度により、公開を希望する媒体に若干の差はあったものの、デジタル化されたデータ(HP, PPT)の希望が多い点は明確であった。

以上の点から、Webデータとして様々なデジタルデータを公開できるWeb-Classによるコンテンツ配信は、公開手段としては受講生のニーズに合致しているといえる。

しかしながら、実際に授業コンテンツ配信をした授業(「情報と社会」)のコンテンツ利用度は、高いとはいえない状況を示している。(図4-1)利用度は、調査年が進むにつれて、「ある程度利用した」が増加傾向で、「それほど利用していない」が減

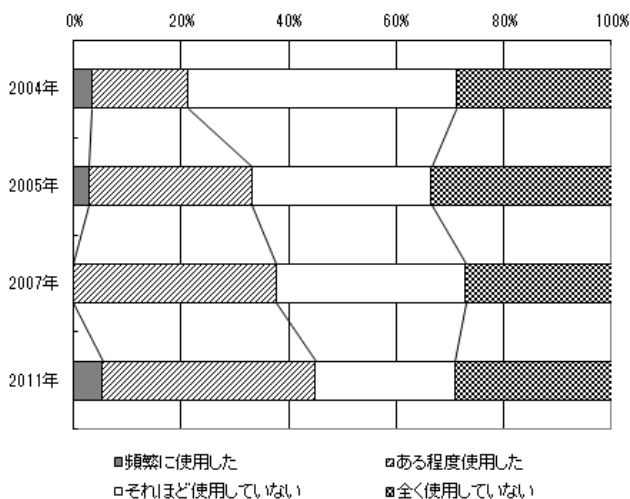


図 4-1 公開コンテンツ (情報と社会) の利用度

少傾向ではあるものの、毎回の調査において一定の30%程度は「全く利用していない」と回答している。

この状況は、利用者にとっての公開されたコンテンツの閲覧する目的に大きく関係していると考えている。授業コンテンツが公開された場合の利用目的としては、「復習」「試験調べ」が多い傾向にあることは、前章で述べた通りであり、この点は、公開を望む理由で「欠席した場合の対応」の回答が多く「予習」の回答が極端に少ない点にも符合する。

つまり、授業コンテンツの公開は希望するが、それは、欠席や出席はしていても聞き逃した場合などの補完であり、ある意味では「保険」のような位置付けと捉えている傾向が高いと考えられる。また、当該授業での公開した授業コンテンツの視聴については、強制的ではなく、あくまでも受講生の自由意志としてきており、そのような方式で実施してきた授業の受講生に対するアンケート調査であったことも大きく影響していると考えている。

利用者にとって、授業コンテンツの公開は望まれているものの、必要となった場合の補完目的ということである点から、本稿で対象としたEZ-プレゼンターのようなツールを利用したコンテンツ作成、Web-Classを利用したコンテンツの配信による省力化された運用は、非常に効果的であると考えられる。

5. おわりに

授業の内容をネットワーク上に公開するにあたり、公開用のコンテンツをあらためて作成するのではなく、授業状況を直接収録した上で、そのデータをほぼそのままの形で公開をしてきた。同時に実施してきた、授業コンテンツの公開に対するアンケート調査の結果から、一般的には、授業コンテンツの公開は強く望まれているが、実際は希望されているほど利用されていないことが確認できた。

オンデマンド型の授業コンテンツである以上、復習的な目的での利用が中心となることは、想定されることである。

コンテンツの作成にはEZプレゼンター、配信にはWeb-Classと異なるツールを組み合わせることで、効率的な運用を可能とした。

Web-Classを利用すれば、テスト形式のコンテンツや、教材の事前配布なども実現可能であり、大きな可能性をもっていると考えている。

参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会大学制度部会(答申)「学士課程教育の構築に向けて」2008.12
- 2) 情報処理学会, 大学等における一般情報処理教育の在り方に関する調査研究委員会編:「大学等における一般情報処理教育の在り方に関する調査研究報告書」2001, 情報処理学会
- 3) 長田秀一, 菊池久一, 板垣文彦「情報リテラシー教育」1999, サンウェイ出版
- 4) 坂本昂 他 監修「バーチャル・ユニバーシティ」2001.07, (株)アルク
- 5) 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科監「ナレッジサイエンス」 2002.12.6 紀伊國屋書店
- 6) 山下泰生, 陳那森「オンデマンド型教材コンテンツの作成から配信とその教育効果について」2011.05 日立IT ユーザ会第47回大会論文
- 7) 渡辺保史「デジタルコンテンツの知的所有権」1998.3.30 (株)オライリー・ジャパン
- 8) 名和小太郎「サイバースペースの著作権」1996.9.25 中央公論社 中公新書

- 9) 荒竹純一「インターネット著作権 1997.11.15 (株) 中央経済社
- 10) 酒井隆「アンケート調査と統計解析がわかる本」2003.10.1 日本能率協会マネジメントセンター
- 11) 植野真臣, 荘島宏二郎「学習評価の新潮流」2010.7.10 朝倉書店
- 12) ICT 基礎教育研究会 編「ネットワーク社会における情報の活用と技術 三訂版」2010.10.28 実教出版